○月と植物との關係 （松崎直枝）

横濱で花守生活をして居る西田常信翁の所で，舊來の花木の話を講義して貰つて居た時に自分は月と挿木椽接の件の事が非常に不思議に考えられた。

何んでも椽接するには潮の滿ちる時に限る。干潮の時だと其步合が惡い。此は自分の實驗であるが多少の疑問があつたので古老に聞いて見たが，矢張り貴重のものは滿潮の時がいゝと敎えて貰つた事を見ると確かに此理由はあると思ふと云ふ話であつた。

如何も此れは眞理でありそうだから，其後學者にも識者にも聞いては見たが正確に敎えてくれる人がない。上原博士が種子を蒔くのに滿潮の時がいゝと云はれたとか云ふのを聞いた事があるきりでまだ正確にしてない。偶然にも明治九年の農業雜誌二十一號を見たら次の樣な記事があつた。

月と動植物の關係　　和歌山縣牟婁郡近露村　鳥居資長

余累年所有の田圃に於て，月夜と暗夜とに收採の得失を試みしに聊か悟り得たる所あるを以て三年前〔日眞眞志〕中に略述せし事ありしに未だ利害如何の答論を爲すの君子なきが故に今又舊稿を探りて貴社に報す。普く同志諸君と商議の上月暗收採の可否を懇敎せられん事を冀望すれば也。

余前年蕃椒の赤く熟したるを貯え置きしに日を經るに隨つて其色白く，其皮薄く成りしに打驚き此理を或老農に問ひけるに月夜に取りし故ならんとは答へたり。退て顧思するに果して然るが故なりし，是に於てや余は秋稻をも試みんと欲して先づ成熟したるを闇夜に刈り又十五日を經て月夜に刈り，以て其兩種を分列比較せしに前の闇夜に刈取たる米一升は後の月夜に刈取りし物より四匁目重く其實入も聊か差異あるを覺えたり。因つて又十有五日を經て闇夜に刈りたる稻を同じく試みしに，其果の重き事三十目の餘なり。其差異の大なる以て知る可き也。然して此を積蓄するに夏日に到り蟲のつく事尠く且又春きて減ぜず飯に炊きて殖え食ふて味美なるを感じたり。

斯くて後諸種の菜穀をも試驗するに槪して收穫の時期に差別に依りて得失あり，世上の農家は此事を覺知するや否や，都て闇夜に刈取る事は得益ある事擧げて算へ難し。尤も茶は闇夜に摘採する時は量目多顆なりと雖其味苦し月夜に摘取したるに量目少寡なれども其味ひ極めて美し。然れば茶は新月滿月の間に摘採するを佳とす可き歟。

藥草芍藥，牡丹の類を闇に掘取る時は量目多分にして其効驗も著明也。菓實の類梨柿を採るにも闇なれば日を經て其腐敗する事稀なりとす。竹を闇に伐る時は蟲害少しと云ふも必ず疑ひなかる可し。

椎茸を作るに闇に椎木伐らざれば椎茸能く生ぜず。獸畜を獲るに闇夜に非らざれば膽汁鮮く蟹類を捕るに同じ闇に非らざれば其肉少しと云へり斯く山海の產物闇夜月夜の差別に仍て增減異同利害得失あるは正さに是天地陰陽の深理あるに依らん。余輩の未だ此理を講究する能はざるは遺憾の至り也。

津田仙氏の註に曰く，前說に依れば月夜に採收すると然らざるとに依て其物量及其性

質に善悪多少の差異あるが如しと雖も此は月夜と闇夜との譯に非ず。全く日月力を分つて地球を牽引するなる可し。況よや世人の已に知る如く燈心草を刈るに陰暦の月末月初の頃に於てする時は其心充實して居るの益あり。

中村先生同人社にて刊行せらゝる文學雜誌第三號に干潮の時樹を伐る可きの道の答と題し，イスパニア國の理學者某が曾つて植物學を講究して潮水の干潮は花草樹木に關係ある理あるを知り蠶を飼ひ桑枝を伐り折るにも干潮の時に於てするの大利あるを發明せりとあり。諸君は宜しく之を參考し玉ふ可し。

惟ふに身心を休息するの時間なる夜中に刈取りて天理に背かずも暗夜の續く頃にだも採收しなば定めて利益あるなる可し。

草木體内の液汁分泌に就ては月暗にとらずに干滿にとりて大差ある事は古老の熟知する所で，現に小石川植物園に勤むる古老の人の如きもヤブガラシ或はヘチマさてはカラスウリ等の蔓物の水を瓶に受ける時に干潮の時は必ず早く一種の粘液を分泌して水液の流出を止めるが，滿潮の時に切斷したるものは甚多量に出づるものであると敎えてくれる。

此の理より推す時は接木も樹液上昇盛んなる滿に行へば活養の度も多かる可く地面中水分を押上げる力ある時の滿潮の時の挿木も結果は良好ではあるまいかと考えられる。

此事はゴム液採集の如きに最も關係深き事と思ふが，果して此點に注意せられて居るか如何か自分はまだ知る事が出來ない。

穀類其他に就ても前述の如き關係成立とすれば只徒らに面積の多少施肥，品種改良等にのみ重きを置き過ぎる當今の農業界には可なり考う可き一大事實ではあるまいか。

例え一年に四分づゝ增したりとせば一年邦内の米穀產額にして六千萬石とすれば二百四十萬石の增收となる。

ヘチマの水とりには舊暦八月十五日夜に切れと云ふ俚俗の言がある，カニの肉は暗夜に多いと云ふし，シヤコの肉の內の俗に云ふカツオブシなるものは月明になくて暗夜にあると云ふ。

此二項は月明闇夜に關係して必ずしも潮の干滿には關係がない樣にも思はれる。昭和四年一月三日南方熊楠先生示敎の手紙によれば「凡そ竹の類は其節の隔が滿月前は上に向き滿月後は下に向いて凸出す。墓處の立花などを切るに此心得肝要なり――」